

20周年記念講演としてのプレイバックシアター

吉川ひろみ

県立広島大学

第 20 回作業科学セミナーでの記念講演を依頼されたとき、「日本の作業科学の歴史と私の作業」というタイトルで引き受けた。以前から作業科学とプレイバックシアターを結び付けたいと思っていたので、この機会を使いたいとも考えた。抄録には過去の作業科学セミナーのテーマと講演タイトルを列挙したが、当日の講演はプレイバックシアターの公演にすることを提案し、実行委員長から承諾を得た（吉川，2016）。

プレイバックシアターは、1970 年代に開発された即興劇で、観客の一人が自らの経験を語り、語られたストーリーをアクターたちが即興で演じ、ミュージシャンが即興で音楽を奏でる（宗像、2006）。私が初めてプレイバックシアターの公演を観たのは、第 15 回作業科学セミナーの特別講演の講師 Gail Whiteford 氏（ホワイトフォード、2013）を成田空港まで出迎えに行く前日だった。Whiteford 氏は芸術療法の経験もあり、プレイバックシアターのことも知っていた。そもそもプレイバックシアターの存在を知ったのは、Journal of Occupational Science の論文だった（Rowe, 2004）。2013 年からは、スクール・オブ・プレイバックシアターが開講する研修コースを受講し始め、創案者の Jonathan Fox 氏とスクール・オブ・プレイバックシアター日本校校長の宗像佳代氏へのインタビューを行った（吉川、2013）。2017 年 11 月にはアジア太平洋プレイバックシアター大会の実行委員長を務めた（ウェブサイト <https://apptc2017.jimdo.com/>）。今の私の存在を定義する作業の一つは、プレイバックシアターだと考えている。

母によると、私は幼い頃から踊ったり歌ったりしていたそうだし、小学生の時は創作クラブで物語を書いていたし、小学校から高校までピアノを習っていたし、作業療法学科の学生時代には人形劇サークルに入っていた。これまでの人生でってきた作業がプレイバックシアターという作業として統合されたような気がする（吉川、2017）。さらに、Fox とパートナーの Jo Salas 氏は Justice（私は「公正」と訳しているが、一般的には「正義」と訳されること

が多い）に強い関心をもっており、スクール・オブ・プレイバックシアターのリーダーシップコースに進級するためには、社会改革（Social Change）のコースが必修となっている。作業的公正（Occupational Justice）という概念は、それまでの私の考えを大きく前進させてくれた。第 20 回作業科学セミナーには、作業的公正の提唱者の一人である Elizabeth Townsend 氏が来日することも、この機会にプレイバックシアターの公演を行うという考えを強く後押しした。

プレイバックシアターの公演は、一人ではできない。私はコンダクターとして司会をし、劇団しましまのメンバーの中の作業療法士 3 名（古山千佳子、高木雅之、中越雄也）がアクターを、スクール・オブ・プレイバックシアターの講師で作業療法士でもある小森亜紀がミュージシャンを務めた。

プレイバックシアター公演は、ショートフォームと呼ばれる気持ちの共有から始めた。コンダクターが、今の気持ちを参加者に尋ねると、一人の参加者が手をあげ、「作業科学セミナーに行こうか、どうしようかと悩んでいた」と言った。その後コンダクターの「見てみましょう」という声と、ミュージシャンの繰り返す音の後、アクター 3 人が順番に、その気持ちを声と身体の動きで演じた。さらに、他の参加者から「作業療法士のアイデンティティに悩んでいた」、「作業療法って魔法だと思った」などの発現があり、アクターとミュージシャンが表現した。

プレイバックシアター公演の中心は、ストーリーと呼ばれる手法である。ストーリーでは、自らの経験を語る人をテラーと呼び、テラーとなった観客の一人はステージにあがり、コンダクターの隣の椅子に座って、コンダクターのインタビューに答えながら自分のストーリーを語る。

最初のテラーの話は、子どもの頃からハサミで息子の髪を切っている。だんだん上手になっているし、楽しい。中学に入って短くしなければならなくなつた。バリカンを買って切った。息子も満足しているようだというものだった。

私は、二人目のテラーとして、Townsend 氏を誘った。彼女は、カナダからオーストラリアへ行き、ある人とランチをしながら、Occupation を発見した。これまで何もすることがない精神障害者に関わりながら、Justice が大事だと考えていた。そして作業的公正という新しい概念が生まれたと語った。

三人目のテラーの話は、一人で勉強していてもディスカッションする相手が見つからず孤独だったが、ツイッターを始めると反応があり、熱い議論ができそうだというもの、四人目のテラーの話は、1日に数回シャワーをあびており、会議で言えなかつたこと、仕事での煩わしいことなどが、シャワーで洗い流されていくというものだった。

最初のテラーの話には、親子関係と時間経過に伴う作業の変化が表れている。さらに、定期的に散髪を続けることによる作業技能の向上に裏付けられた自信と外的環境から要請された高い難易度の課題に挑戦するという行為者の内的変化を推測することができる。私は、この息子はいつまで親の散髪を受け入れるのだろうと思い、成長の喜びと巣立ちの寂しさを予感した。

Townsend 氏（リズ）の話は、作業科学セミナーにぴったりで、私が聞いたかった話だった。リズは精神科の作業療法士として、無為自閉的に過ごす精神障害者を何とかしたいと考えていたのだろう。社会システムや施設のシステムが理想的な作業療法実践を妨げ、作業療法士の気概をへし折ってしまうと考え、問題解決の活路を社会的公正（Social Justice）に見出そうとしていた（Townsend, 1993, 吉川, 2003）。一方、Ann Wilcock 氏（アン）は Occupation に強い焦点を当て、長い歴史と保健という広い領域から考えていた（Wilcock, 2006）。カナダからオーストラリアへの飛行機の中で、リズは Justice というよい考えを話そうと思っていた。オーストラリアでリズとアンはランチをしながらお喋りをしていた。アンは Occupation について熱く語った。そして二人は、Occupational Justice（作業的公正）という素晴らしい考えを発見したのだ。私は、2014年にこの二人が書いた本の章を思い出していた（Wilcock & Townsend, 2014）。作業的公正という概念は、今後さらに洗練され有益な関連概念を生み出し、効果的な介入法の開発につながるかもしれない。二人の関係は他人で、異なる大陸に住み、専門領域も違うが、共通のビジョンをもっている。このビジョンは多くの人々に知れ渡り共感を呼ぶことだろう。

三人目のテラーの話は、ビジョンの共有に至る最初の一歩を示しているように思う。まずは仲間を見つけ、思いを表明し、ディスカッションを重ねる中で考えが発展していく可能性がある。仲間がどこにいるかはわからない、

仲間だと思った人がそうではないかもしれない、ビジョン共有までには、難所がたくさんあるかもしれない。四人目のテラーの話は、分かり合えない相手がいても洗い流す術があることを教えてくれる。建設的な前進する作業ばかりではない、区切りを付け、リセットするための作業もある。

ストーリーの後、再びショートフォームを行った。このセミナーでの経験を大学院での研究に生かせたらいい、実習生に作業療法の楽しさを伝えたい、当たり前にできると思っていたことが結構複雑だときづいた、といった気持ちをアクターとミュージシャンが表現した。

公演後、Townsend 氏の発案で実行委員長から、作業的公正をテーマとした翌日のワークショップの最後に、グループディスカッションの発表内容をPlayback Theatre の短いストーリーとして表現することを依頼された。自動車運転を禁止された高齢者、貧困のために習い事ができない子ども、過重労働を強いられる外国人労働者、職場の圧力により理想とする実践が行えない作業療法士を演じた。終了後 Townsend 氏から「Playback Theatre は第20回作業科学セミナーの最後を素晴らしい忘れ難いものにしてくれました。エネルギーと想像力で『作業』と『公正』が一緒に持ち込まれたことを永遠に忘れないでしょう（Thanks to Playback Theatre for making a wonderfully memorable ending to the 20th Occupational Science Seminar. I must also comment that this group performed DURING the Seminar and will be remembered forever for bringing "occupation" and "justice" together with such energy and imagination!）」というコメントをいただいた。

人々の経験、語られたストーリーの中に作業があれば、その作業を理解する手法としてPlayback Theatre は有効だと考えている。テラーの主観世界を他者であるアクターが表現する。観客は自分の経験と目の前のストーリーを照らし合わせ、心の奥の深いレベルで共感することができる。

文献

- 吉川ひろみ（2016）：日本の作業科学の歴史と私の作業。作業科学研究 10 : 85-86.
- 宗像佳代（2006）：Playback Theatre 入門：脚本のない即興劇。明石書店。
- ゲイル・ホワイトフォード（2013）：作業と参加とソーシャルインクルージョン。作業科学研究 6 , 71-79.
- Rowe, N. (2004). The drama of doing: Occupation and the here and now. Journal of Occupational Science 11(2), 75-79.

- 吉川ひろみ (2013) : プレイバックシアター. 作業科学研究 7, 27-35.
- 吉川ひろみ (2017) : 「作業」って何だろう 第2版. 医歯薬出版.
- Townsend, E. (1993): Occupational therapy's social vision. *Canadian Journal of Occupational Therapy* 60, 174-184.
- 吉川ひろみ (2003) : 学びたい世界の作業療法. 作業療法ジャーナル 37, 239-242.
- Wilcock, A. (2006). *An occupational perspective of health*. Slack, Thorofare.
- Wilcock, W. A., Townsend, E. A. (2014). Occupational justice. In Schell, B. A. B., Gillen, G., Scaffa, M. E. (Eds). *Willard & Spackman's occupational therapy 12th ed*. Lippincott Williams & Wilkins, Philadelphia, pp. 541-552.